

宮嶋資夫『坑夫』 試論

——ポスト・プロレタリア文学
の暴力論——

荒木優太

序、プレ・プロレタリア文学としての『坑夫』

下層労働者坑夫達の生活をリアリスティックに描いた、宮嶋資夫の処女小説『坑夫』は大正五年一月自費出版に近い形で近代思想社から刊行された。しかし堺利彦と大杉栄が序文を付したこの初版はすぐに発禁処分を受け、一般の目に触れられるようになるには四年の年月を待たねばならなかった。つまり、このテキストが初めて多くの読者を獲得したのは小説集『恨みなき殺人』(大九・六)に所収されてからであり、そうしてそこでも尚、一部の伏字が施されることが日の目を見る条件であったのだ。

冬の時代という社会主義文学への弾圧が高まる中で、様々な外部からの規制と折り合うようにしてこの『坑夫』というテキストは受容されてきた。この歴史性は事後的に見れば『坑夫』論者達がもった、労働文学やプロ・プロレタリア文学の始まりとして『坑夫』を位置づける傾向性をも構成しているといえる。例えば社会主義系の思想家である荒畑寒村は次のように述べている。

「『坑夫』は一個の無名作家が処女作として、種々なる欠陥を有してゐたであらうが、然しプロレタリア文芸の先駆をなせる作品として、注目に値すべきものであつた。然し此の作に於ては、階級的自覚ある労働者の集団的な意識は、猶未だ現はれてはゐなかつた」(註一)

寒村が言いたいことは、時代の制約があつたが為に、『坑夫』には多くの「欠陥」はあるものの、そこにはプロレタリア文学の芽生えとして評価できるような価値が認められるということだ。この「先駆」性への評価は寒村だけに止まらない。森山重雄は「労働文学の成立を力強く告知した一つの記念碑的な意義をもっている」と評価し(註二) 中山和子も『坑夫』を「日本の労働階級がまだ組織も無く自覚も持たなかつた時代に、内には不満を抱きつつ、卑屈な現状維持と狡猾な保身にのみ生きるその無力へ、主人公の死にいたる兇暴な孤独を通して、激しい憎悪と軽蔑をこめた絶望の訴え」だと規定している(註三)。

「労働階級がまだ組織も無く自覚も持たなかつた時代」での「記念碑的な意義」、それが「先駆」性の謂いと解釈できるだろうが、しかしこれらの論者達は或る進歩史観を無条件に採用していることに注意せねばならない。つまり、『坑夫』のような労働文学は、欠損を備えており、その欠損を補い、そして一歩進歩した後に現れるのがプロレタリア文芸であるという歴史観である。勿論、文学史的常識に照らし合わせてみればこの歴史観に疑義を挟むことはできない。だが、この歴史観は大きな障害をももたらしている。つまり、その歴史観に於ける『坑夫』の位置は『海に生きる人々』(葉山嘉樹)や『太陽のない街』(徳永直)、『蟹工船』(小林多喜二)といった以降のプロレタリア文学の系譜の参照を経て始めて価値付けられ、それ単独では評価不可能な従属項としてのみ規定されてしまっているということだ(註四)。

しかし、例えば労働運動など全く流行らなくなってしまった時代に於いて、或いは文学そのものの影響力が嘗てに比べ衰退していく時代であつて(そのような時代を想像することは可能だろう。というよりも今日は既にそのような時代であるように私には思えるが) 論者達が最先端だと感じていたプロレタリア文学そのものが「記念碑的な意義」しか持ち得ない状況が到来した時に、その歴史観では『坑夫』はアクチュアリティーから断絶された「記念碑」の「記念碑」という無価値しか与えられないだろうことは容易に想像できる。しかし、それは本当なのだろうか。『坑夫』というテキストは後続したプロレタリア文学の参照を経なければ位置を持たない無価値のテキストなのだろうか。

私見からすればその問いには否と答えることができる。というよりも寧ろ、先入見的な歴史観を積極的に括弧がけすることによって我々は『坑夫』というテキストの単独の価値 具体的にそれは共同体や連帯と暴力を巡る今日的な問いを意味するのだが、そのアクチュアリティーを見いだすことができる。よって、この試論の目的はプロレタリア文学の参照に従属されない『坑夫』固有の価値を定立させることにある。

一、仲間と闘う「軍鶏」

さて、その為には今一度の先行研究への注視が要請される。先行研究で幾度も指摘されている『坑夫』の欠陥は、多くのプロレタリア文学に比べ「集団」や「組織」が存在しないという点にあり、そこに時代の限界や前時代性が認められていた。成程、確かに『坑夫』の主人公石井金次は仲間達と打ち解けることができず、集団的な行動を好んで取ることなく、山の景色を眺めることに孤独な喜びを見いだしている。勿論、個々人との関係性はないではないが、そこからより大きな集団性を獲得することは失敗しているといえよう。そしてそれ以上に彼はしばしば仲間達に乱暴をふるい、同じ「兄弟」たちから怖れられている。作中でいえば石井は百姓で床屋も営む男妾の次郎や、石井を死のきっかけを与えた大澤という屈強な坑夫などと流血沙汰の喧嘩をしている。このような挿話によって、石井はその攻撃的な性格のため仲間を攻撃し、仲間達から疎んじられ、自身の孤独を深めているように見える。この状況を端的に象徴している場面がある。それは冒頭付近の「軍鶏」に関する描写である。

「長屋の前には軒並に大きな鳥籠が伏せてあつて、赤肌に毛の脱けた鋭い眼の軍鶏が太い声で闘をつくつてゐた。彼等は坑夫達の荒い血を娯ませるために飼はれてゐるのであつた。退屈になると坑夫等は筵で囲んだ土俵の中に、軍鶏を入れては蹴合はせるのであつた。同類と闘ふためばかりに生れて来たやうな鳥は、狂気のやうに争つた。鶏冠がちぎれて頸も羽根も血だらけになつて目を白黒させて倒れると、坑夫等は声を揚げて喜ぶのであつた」(第一章)

「同類と闘ふ」「軍鶏」。この象徴性は重要だ。何故なら、「軍鶏」と同じく石井の主なる闘争対象は全て同じ坑夫や農民といった下級労働者、「同類」に他ならないからだ。プロレタリア文学的な価値観に従えば、坑夫等は過酷な労働を科してその成果を搾取する資本家や雇主といった敵に結託して反抗していかなくてはならない。しかし、坑夫達はそれができず、外部へ向かうべき暴力は内部へ向かい、坑夫共同体は仲間が仲間を殺し合う内ゲバ的状况へ陥る。この側面が先行研究に於いて、欠陥を導き出す因子となっていた。

しかし、この場面では重要な点がもう一つ象徴されていることを見落としてはならない。つまり、「軍鶏」(例えば石井)を殺す為には『坑夫』の世界では直接相手取って対面的に殺害する必要はなく、その殺害条件は「軍鶏」を「囲ん」でその自由を奪ってやれば、それで勝手に「軍鶏」は他の「軍鶏」(例えば大澤)と「狂気のやうに争」い、「血だらけになつて目を白黒させて倒れる」ということだ。ここには明らかに(「階級的自覚」があるかどうかは別として)「集団的な意識」が介在している。そうでなければ自由は制限できないからだ。そして、正しくこの「集団」こそが共同体の暴力を行使するのである。

二、散在的共同体の成立

事実『坑夫』には集団や組織がない訳ではない。例えば、石井が労働運動を起した後のことだ。「彼が日蔭者の浪人になつて、山から山へこつそり隠れて使役を求めて渡り歩くやうになつた時、所々の山に散在してる彼の兄弟分や仲間達は彼を隠匿する事を恐れた。何処へ行つても彼は態のいゝ口実で追つ払はれた。突き刺すやうな冷たい山風の吹く冬になつても彼は、薄い着物に慄へながら苦しい旅を続けなければならなかつた」(第二章)

ここでは仲間の坑夫による組織的な疎外が語られている。つまり、石井の「苦しい旅」は、彼を凶暴で協調性のない者と見做す仲間からの受け入れ拒否によって引き起こされる訳だが、その疎外は連携的であり、情報ネットワークが十分に機能している。そのネットワークは、一個の山を越えて、石井金次という人間がどういう人物であるかという同一で固定した情報を広域化させる機能をもっている。この高度な情報伝播によって石井は自身の過去を、そして自己同一性(アイデンティティ)を受動的に一方的な仕方で決定されてしまう(石井の「乱暴」については茶屋の女や選鉱のお新のような人達さえ共通に認識している)。

しかしこの組織性を構成している条件とは何処にあるのだろうか。最も重要な点は坑夫という共同体が局在的なものではなく、ばらばらに散らばっていく散在的なものであるということだ。石井の「俺達みたいな風来坊は自分の家つてもものあねえんだし、山で生れて山を歩いて、死んでも山に埋められるんだから、山が家みたいな気がするのも無理やねえかも知れねえやな」(第一章)という台詞は象徴的であり、テキスト内の坑夫達の流動性の高さは至る処で見出される。例えば、春になると飯場の若者は「暇を取つては当てもない旅に出て行」き、「借金の多くある為に暇を取る事の出来ない者は、夜更けてから他人の着物を盗んで着て、そつと脱走」し「飯場にある者の頭数は殖えていつたが、その顔ぶれは余程変つた」(第四章)。又、「山の鉱況」がよくなれば「事務所では掘進を急ぐ為に、どしどし人を増すので、飯場にも長屋にも坑夫は一杯にな」り、自然見知らぬ顔も増える。特に、ある夜「諸国から寄り集つた坑夫等が、各自に生れ故郷の盆踊りをやる」(第五章)というイベントはそののに集まった人の生まれ故郷が単一ではなく全国からバラバラに集められたことを端的に示す。単一の生まれではそのイベントは成立しえないからだ。

坑夫という人材であるだけで、遠くの見知らぬ者がその日のうちに「仲間」や「兄弟」となる『坑夫』世界は、逆にいえば見知った者が「当てもない旅」や「脱走」等によって見知らぬ土地に根付く世界(「風来坊」の世界)でもある。ここに、広範囲の非局在的な情報ネットワークの成立がある。石井を知る者達は散在し、見知らぬ土地へと旅立つ。そうして、石井の知らない処で情報が伝播し、固定的な人物像が共有される。石井がどんな旅をしても自分を知らない者に出会うことはまずありえない。

石井が全く別の職種に就くことができればその柵も断ち切れたのかもしれないが、見た目のみすぼらしさから都会人に全く相手にされない彼の都体験や、彼の父が坑夫病(よろけ)になって死んでしまう迄坑夫であり続けた挿話が示しているように、坑夫職には転職のチャンスが殆ど与えられておらず、流動性の高さも同一の共同体内(坑夫共同体内)だけという制限がつく。何処であれ「仲間」が、「兄弟」がおり、石井という人間の過去を一方的に規定し、疎外する。石井は自分の過去を断ち切れず、新規に一転した生活を始めることができない。散在的共同体はその進展の度合いに従って遍在的共同体と化し、石井のような「乱暴」な対象を取り囲み、その自由を拘束するのである。

三、自由の条件

このように、『坑夫』世界に於いて「自由」とは、流動性の高さがそうであるように、ある制限の下で始めて獲得されるものである。制限された「自由」、或いは「自由」の条件。ここにも又散在的共同体の性質が波及している。このことを考える為に「自由な旅」に乗り出す若い坑夫の佐藤と彼を見送りながら自身と佐藤とを比較する石井の場面を引用しよう。

「二人は和らかな春の気に包まれて、楽し気に酒を酌み交した。何時もひそめた石井の眉もやゝ開けて、険しい眼もうつりと細くなつてゐた。彼〔石井〕は麗らかな陽を浴びて長閑な村を歩きながら若い娘にからかつたり、夕暮になると宿賃のいらぬ飯場に泊つて、方々の国々の様子など話しては、心ゆくまで放浪した時のことなどを想つてゐた。そして何処の山へ行つても、誰も恐ろしがつて相手にする者のない今の身を思つては、自由な旅に出られる佐藤に比べて、寂しく悲しいやうな気にもなつた」(第一章)

そして石井は佐藤に次のようにいう。

「もうそろそろ野州花も咲き出すから、足尾坑夫も巢立ちをする時分だなあ、初めの中は彼方の山がいゝか、此方へ行きやあ甘いことがあるかと思つて、みんな当なしに歩くんだけど、段々歩きたくつて歩くやうになつちまわ、暗い坑内へ這入つて仕事してるより、銭なしでも呑気に清々と歩いてゐる方がよくなるからな、俺なんか何処へ行つても陰呑がつて使つてくれねえから、手前で危くつて浪人することも出来なくなつた。お前歩いてる中に甘いことがあつたら呼んでくれ、え佐藤」(第一章)

石井の実感が『坑夫』世界に於ける「自由」のあり方を説明している。つまり、「自由な旅」や「浪人」には必ず自身を受け入れてくれる複数の鉱山が必要であるということ、石井の言葉(「山で生れて山を歩いて、死んでも山に埋められるんだから、山が家みたいな気がする」(第一章))を借りるなら「自由」には散在した複数のホーム(「家」=受け入れ場所)が必要であるということだ。佐藤の「自由な旅」の内実は鉱山から鉱山への移行状態であり、複数のホームが彼の旅路を保障している。しかし、石井の場合、散在的遍在的共同体の情報ネットワークは彼に複数のホームをもつこと、そして「浪人」することを禁じ、単一のホームを彼に押し付ける。ここに自由は生起しない。

そしてそればかりか、テキスト内で頻出する石井の「孤独」もこの点に端を発しているのではないかと考えられる。ホームからホームへの交通を禁じられた彼に残されたのは「乱暴」の烙印を無条件で押しつけてくる無数の坑夫達であり、そこから逃れようとするれば、必然的に「孤独」な生活を送らなければならない。それ故、「こんな不自由な山奥でつまらない日を送るのも、暗い牢屋で暮すのも大した変りはあるまいと思ふ」(第四章)と彼が思うのも当然だ。石井は間接的に管理されている。石井の単一の「山奥」(ホーム)は「牢獄」と大差ない。

小田切秀雄は石井に「反逆の自然発生的な性質とそれが陥ることの多い粗暴な、またはねじけた行為」を認め、そこに「自己の解放の道」としての労働運動失敗の原因をみている(註五)。しかし石井が「反逆の自然発生的な性質」をもち「ねじけ」ているように見えるのは、彼を取り巻く共同体が物理的にも心的にも彼を管理していることの効果でしかないのではないか。もし、それらの性質を彼固有の本質的な性格として認めてしまうのであれば、その判断は、彼を良く知りもしないのに石井の受け入れを拒否した特定されない無数の坑夫達と同じレベルに止まっているのではないか。石井の問題を個人主義的テーマへ還元してしまう瞬間に、そこでは共同体の問題が閑却されてしまうのだ。

『坑夫』に於ける連帯の困難を石井個人の性格や心理として回収するべきではない。何故なら、もう既に坑夫共同体には組織性やその連帯性が認めることができ、正しくその効果として、「反逆の自然発生的な性質」はでっちあげられるからだ。それは自然発生的な性格であるどころか、組織によって人工的に構成さ

れた情報である。石井にとって「自己の解放の道」とは何よりも先ずその共同体からの脱却を意味していた筈だ（註六）。

四、責任者なき共同体の暴力

整理しよう。散在的遍在的共同体は石井に大別して二つの暴力を与える。第一にはアイデンティティの固定（過去の決定）であり、共同体の成員はたとえ石井に会ったことがなくとも彼がどのような人物であるのかを知って事前に先入見を構成させる。第二にはホームの固定（自由の剥奪）であり、新しく対人関係を更新できなくなった彼は自身を「孤独」に追いやるしかない。

この二点は別種の暴力の発露というより、相互補完的なものであるが　つまり、アイデンティティの固定が単一のホームを押し付ける一方で、ホームを固定されたが故にアイデンティティも更新されない　、いずれにしる散在的遍在的共同体がこの暴力を司っている。逆説的なことではあるが、石井に与えられた二つの暴力的固定は広域に散在する成員の流動的な共同体こそがもたらしているのだ。

そうして、この暴力の発露はテクストの最後で頂点に高まる。つまり、この暴力は石井を殺害するのである。乱暴な坑夫である大澤と流血沙汰の喧嘩をした後の場面だ。

「取巻いてみた坑夫等の眼には惨忍な笑が浮んだ。　その中には女房を弄ばれた者もあつた。彼に怒罵されたり擲られて恨を忍んでみた者もあつた。けれ共彼の心を知つてる者は一人もなかつた　誰か最初に、「つらあ見る畜生ツ、余り威張りやがつたもんだからいゝ態だツ」と力任せに蹴飛ばした。せかれてみた水口を切られたやうに、卑怯な下駄履きの足は怪我人の上に注がれた。反抗の力を失つた者にする復仇は容易かつた。妙な唸り声は直ぐに消えて、手足のものがきも止んで了つた」(第五章)

組織的な疎外は、最終的に組織的な殺害にまで高潮する。しかしこのことの意味は単に集団で一人の人間を殺害した非人道性だけに限定されない。例えばこの後、石井の世話を焼いていた吉田は「誰れがこんな真似をしたんだ」と怒鳴るが、「それに答へる者はなかつた」。考えてみれば当然だ。何故なら、共同体全体が石井殺害に加担している為犯人となる人称態（「誰」）を特定できる筈もなく、「誰」にもレスポンスビリティ（責任＝応答可能性）はないからだ。あえていえば共同体そのものが罪の共同体であるが、しかしここですぐさま坑夫共同体が散在的共同体であったことを思い出さなければならない。その共同体は持続的な固定性を欠いており、その散在も上位の管理者の法に従っている訳ではない。だからこそ、石井を殺害した罪の共同体の成員は誰も処罰されることなく、ばらばらに散って、各々は匿名化し、新たな共同体に組み込まれていくだろう。そこで罪を背負うような責任主体は生起しない。有用な労働人材を管理しつつ、不要になれば殺害し、しかもその罪は不問となる。ここに散在的共同体の最たる暴力がある。

五、ポスト・プロレタリア文学としての『坑夫』

このように、『坑夫』に於ける共同体は決して前時代的な組織ではなく、散在性と遍在性を備えているという点で極めて現代的な脱中心化された組織を形成している。但し、ここでいう脱中心性とは中心の不在を意味しない。それは複数の中心が離散と集約を繰り返しながら、尚一定のネットワークを保持することを可能にする組織である。勿論そこに、坑夫共同体のリーダーである飯場の頭や坑夫を管理する「事務所」のような上位の統括者は存在し、上意下達の構造は存続している。しかし、共同体内部で坑夫達の闘争は上位の承認を得ない儘、それぞれ場当たりに暴力性が発露する為、上位下位の区分はおろか敵味方の区分さえ無化されていき、坑夫達は本来戦うべきではない「兄弟」と闘争する。丁度、「軍鶏」が対面する「同類」と戦うように、だ。この組織的運動を先行研究の論者達は所謂「組織」や「集団」とは見做せなかった。しかし、その脱中心化された組織は頭領やリーダーや代表者を打倒するだけでは解体されない力強く頑固な耐久性を示しているのではないだろうか。

例えば、先行研究で比較的意識されたプロレタリア文学、その代表的作家の一人であろう小林多喜二は、『蟹工船』の中で個々人が打倒されても維持する不屈の「集団」(註七)を描き、又『党生活者』に於いて運動の戦略として「見えない組織をクモの巣のようにのばして置く」(第八章)ことや「組織の胞子を吹き上げ」ることによる成員散在的な組織展開の重要性を語っていたが、しかしそれらで獲得される組織の耐久性はもう既に『坑夫』が描いていたことだ(散在的共同体)。そして、『坑夫』はその先、つまり、成員が散在し、組織が脱中心化されたとしても、それは権力への対抗運動にとって必ずしも効果的なものを帰結させるのではなく、寧ろ敵味方の区分が曖昧になり、仲間が仲間に手をかける内ゲバ的リンチ的状况を招いてしまうということさえ描いている。小林多喜二は仲間であった筈の諜報(スパイ、三船留吉)に密告され、結局殺された。散在性は敵味方の区分を曖昧にし、必然的に両義的存在(諜報)の侵入を許してしまう訳だが、そのような状況は「兄弟」が「兄弟」に手をかけ、誰が敵で誰が味方なのか分からないような『坑夫』世界によって予告されているのではないか。

平成二〇(二〇〇八)年付近、『蟹工船』は非正規雇用やワーキングプアがもたらす貧困の問題と共に流行し、新たに映画化も果たした。或いはその文脈で初期プロレタリア文学である葉山嘉樹の作品も文庫化(『セメント樽の中の手紙』、角川文庫、平二〇・九)し、若い読者にとってもリーダブルなテキストとして復活した。だが、そのような状況にあっても、プレ・プロレタリア文学としての『坑夫』は今日忘却されている。研究の更新も森山や中山などの時期に比べ、活発とは言い難い。しかしながら『坑夫』は今迄みてきたように決してプロレタリア文学の「記念碑」ではない。『坑夫』は寧ろ多くのプロレタリア文学の登場の後でこそ、その真価を露わにするポスト・プロレタリア文学であり、今日的な共同体と暴力の問題系が既に書き込まれている原点的テキストなのである。『坑夫』再読は今こそ要求されている。

- (註一) 荒畑寒村「社会主義と文芸」/『新潮』、昭二・八。
- (註二) 森山重雄「宮嶋資夫」/『日本文学』、昭三八・一〇。
- (註三) 中山和子「宮嶋資夫論」/『文学』、昭四〇・一一。
- (註四) 例えば佐藤勝は葉山嘉樹のテキスト(『淫売婦』や『海に生くる人々』)を引用、比較しながら『坑夫』を論じている(『「坑夫」論』/『日本近代文学』昭四〇・一一)。中山和子も同様だ(『「坑夫」について』/『日本文学』昭四八・一)。
- (註五) 小田切秀雄「解説」/『日本近代文学大系 第51巻 近代社会主義文学集』、角川書店、昭四六・九。
- (註六) 少し文脈はずれるが、ここで考察した問題点は現在研究されている学校内でのいじめ対策と同じ問題性を共有しているように思われる。例えば、内藤朝雄+荻上チキ『いじめの直し方』(朝日出版社、平二二・三)では、いじめを直すために必要とされるのは「逃げちゃだめ」や「仲良くしなさい」といった個人への道徳主義的助言ではなく、所属している学校から転校し、いじめっ子と距離を取ることに、具体的にいえば学校選択制度の積極的導入であることが主張されている。小さな共同体(学校)で一旦いじめの標的にされたものは、内部においてそれを解除することが難しく、「排除」されないまま「飼育」的にいじめが持続していく。先生や友達からの道徳主義的助言はいじめられっ子個人に問題性を還元してしまっており、更にいじめられっ子を心的に抑圧してしまう危険をもつ。これを食い止めるためには、共同体を交代し、新規の関係を取り結ぶことを可能にさせるような「仕組み」(環境の整備)を作っていかなければならない。他にも田中美子『「いじめ」のメカニズム イメージ・ダイナミクスモデルの適用』(世界思想社、平二二・九)等に同様の主張がある。このことを示唆程度に指摘しておきたい。
- (註七) 小林多喜二は蔵原宛書簡(昭四・三・三一)の中で、「この作〔『蟹工船』〕には「主人公」というものがない。「銘々伝」式の主人公、人物もない。労働の「集団〔グループ〕」が、主人公になっている」と書いており、事実『蟹工船』には個々人に固有名は命名されておらず、個人の意識や心理を超えたダイナミックな「集団」の運動が描かれている。

本文の引用は『宮嶋資夫著作集』第一巻(慶友社、昭五八・四)を使用した。

本論文は『大正文学論叢』第1号(明治大学大学院宮越ゼミ、平二四・二)に収録されたものである。

宮嶋資夫 『坑夫』 試論 ポスト・プロレタリア文学の暴力論
<http://p.booklog.jp/book/51336>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/51336>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/51336>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ